

平成25年度研究成果中間報告書《平成25・26年度教育課程研究指定校事業》

都道府県・指定都市番号	13	都道府県・指定都市名	東京都・多摩市
学校名 (児童生徒数)	多摩市立多摩第一小学校 (736人)		

(本研究に係る問い合わせ先)

所在地：〒206-0011 東京都多摩市関戸 3-2-23

電話番号：042-375-7020

研究内容等を掲載しているウェブサイトの URL：<http://www.tama.ed.jp/tamadail/>

【研究成果のポイント】

○研究課題番号：5 (4) ESD

○研究のキーワード：ESD 問題解決能力 探究学習 キー・コンピテンシー

○研究成果のポイント：

持続発展教育 (ESD) の目的は、環境問題などの持続不可能な課題解決を図るために、意欲をもって他と協力して問題解決を図る能力と態度の育成にある。国立教育政策研究所がまとめた ESD で育成する 7 つの能力・態度を参考としながら、小学校の指導実態に合った 3 つに再編し、指導実践を通して成果と課題を検証する。

【研究の目的、研究内容】

(1) 研究主題

持続可能な社会づくりの推進に向けた、問題解決力を身に付け自立できる子どもの育成

(2) 研究主題設定の理由

本校は、敷地内に緑が多く、北側には多摩川が流れている等自然環境に恵まれている。また学区内には室町時代の古戦場跡があるなど歴史のある地区である。このような環境や歴史のある地域での学びを中心とした ESD によって、次世代を担う児童の問題解決能力と態度を育成するため、課題を設定し研究を進めた。

ESD は、持続可能な社会づくりへの価値をもつことや問題解決のために行動することを最終的には求めている。しかし、小学校の発達では、まず、実践に向けた意欲や能力、態度の育成を図る必要がある。そこで本校では、①よりよく問題解決を図る能力②協力する態度③意欲の 3 点の育成をねらいとし、特に問題解決力の育成について研究を進めた。

(3) 研究体制

学校教育目標である「自ら考え行動する子」の育成をめざし、校長の学校経営方針のもと、校務分掌の研究部が中心となって研究を進める。研究部では本校 ESD の理論構成や発達段階に応じた学年間の活動内容の調整、児童意識調査の作成と分析、研究発表会の計画などを行う。また、学年ごとに研究分科会を設け、各学年の生活科や総合的な学習の時間の指導内容と指導方法について検討し、実践を行う。全学年が研究授業を行い、実践内容の検討を全教職員で行う。

(4) 1年間の主な取組の経過

平成25年度	4月	校内研究方針確認、講演 五島政一先生 (国立教育政策研究所総括研究官 本研究担当官)
	5月	研修会：ネイチャーゲーム講師 山口哲也先生 (日本シェアリングネイチャーゲーム協会)
	6月	研究授業 6年生「発電・エネルギーについて考えよう」 児童意識調査1実施
	7月	研究授業 2年生「多摩川 宝探し大作戦」講師 村山哲哉先生 (教科調査官 本研究担当官)
	9月	研究授業 4年生「環境を考えよう～多摩川を調べよう～」講師 五島政一先生
	10月	研究授業 3年生「わっしょい！受け継がれる祭り」 1年生「しぜんいっぱいたのしさいっぱい」

12月	研究授業6：5年生「お米大好き！日本人」 児童意識調査2実施
1月	平成25・26年度 国立教育政策所教育課程研究指定校中間発表
2月	校内研究 今年度の反省校 来年度の研究方針について

(5) 具体的な研究内容・方法，研究を進める上での工夫点等

① 研究内容

本校では，ESDで育む能力と態度を「問題解決能力」「つながり」「意欲」の3つに設定した。その際，国立教育政策研究所が昨年度発表した「ESDの視点に立った学習指導で重視する能力・態度（例）」やOECDのキー・コンピテンシーを参考にした。（下表参照）

これら能力・態度のうち，特に問題解決能力に注目した。6年間の生活科・総合的な学習の時間を中心とした指導で，問題解決能力はどのような指導方法，評価方法によって育成・向上するのかということについて研究を進めている。

多摩第一小のESDで育む能力・態度		国立教育政策研究所 ESDで重視する能力・態度 (例)	OECD キー ・コンピテン シー
問題解決力 「工夫して」 思考力 判断 力 表現力	課題を見つける力	①批判的に考える力	相互作用的に 道具を用いる
	仮説に基づき計画を立てる力	②未来を予測して計画を立てる 力	
	調べる力・まとめる力・発信する 力	③多面的，総合的に考える力	
つながり「みんな で」 協力 合意形成	協力する態度	④コミュニケーションを行う力	異質な集団で 交流する
	他者から学び高め合う態度	⑤他者と協力する態度	
意欲 「進んで」 意欲 実践	意欲をもって活動に取り組む態 度	⑥つながりを尊重する態度	自律的に 活動する
	生活に生かし実践する態度	⑦進んで参加する態度	

② 研究方法

全学年で問題解決学習のプロセスを活用して，児童が主体となった問題の発見・計画・調査・まとめ・発信を指導する。活動をポートフォリオ等で記録し，児童の能力・態度の変容を調べる。また，年間の活動前後で児童の意識調査を行い，意識の変容を読み取る。指導方法と評価方法を全教職員で確認し，改善を図りながら研究を進める。

③ 研究を進める上での工夫点

本校の研究では，ESDで育む能力・態度を3つに絞ったことで，指導のねらいや研究方針が明確になった。また，問題解決能力の育成・向上を研究の中心としたことで，児童の変容や研究の成果が明確になった。さらに，指導方法として，問題解決のプロセスを活用すると共に，流れを図式化することで，全体の流れと現在の指導の位置が確認しやすくなり，指導や研究が曖昧にならなくなった。

【研究成果とその意義等】

(1) 研究成果

2年研究の1年目であり，まだ十分な成果といえるものではないが，研究の方針やねらいが教員に定着した。また，児童の活動意欲が高まった。児童自から地域の方や専門家にインタビューを実施したり，見通しをもって活動したりすることも定着している。

(2) 研究成果の意義等

身近な課題を，総合的な学習の時間に問題解決のプロセスで取り組む時，自ら問題を設定し工夫して解決を図り，教科等の知識や考え方を活用して，思考力，判断力や表現力が

向上したり，協力する態度が向上したりして，活動意欲の高まりが見られた。このことから，総合的な学習の時間を問題解決のプロセスで取り組ませることが，ESD を指導する上で効果的であることが明らかとなった。

(3) 研究2年目へ向けての課題と改善

来年度は，一層児童の主体的で工夫された活動を充実させることと，活動の評価方法を明確にすることが課題である。また，発信方法や今年導入されたタブレット PC の活用など，学年ごとに育成するスキルの明確化も課題である。